

『Umano Disumano』 第二巻 — ジオ・モンテスによる序

『Umano Disumano』第一巻のあと、私はこのような序が必要だと確信した。一人称単数、全知、普遍の口調で。そう、これは急を要する！自分でそう納得したのだ。左手で書いている。右手がまだ痛むからだ。ひどい一撃を食らった。あちらの山羊くさい葡萄畑で祝っていたとき、隠れた谷へ滑り落ちて負った外傷である。この忌まわしい地獄で私が行き着いた地球温暖化のただなか、責め苛まれた燃える唇と、発情した無性の踊り手たちのあいだにあって、私が旅立つことは絶対に不可欠だ。いまや溶けきってほとんど存在しない氷河の、未踏の頂を目指して。何百万年もの何百万もの化石と、ついに下降する運動でふたたび流れはじめ、深淵に新たな深さを贈る煮え立つ水とのあいだで、泥の地面に長靴を押しつけるために。左手で書くのは、右手が忙しいからだ。裸の山のまわりに現れ、こうして浮かび上がってくる修道僧たちの、曲がりくねった道の上で加速するのに忙しいのである。そして峰と峰のあいだには、高く張られた綱渡りの綱が吊るされている。必要とあらば、あの山の上で存在を祝いに落ち合えるように。ただ、ひとりであることの孤独だけによって結ばれて。徳高き私は、左手で書く。筆跡を変え、意識の流れを混乱させるために。あとで読み返したとき、すべてが誰か別の人間によって書かれたように思えるように——もっとも最後にはすべて活字に組まれ、読むべきものは何も残らないだろうが。左へ向けて私は罪悪感も回してやる。自分自身を笑い、私という、そして昔からそうであった、あの鈍いやつをからかうことを許さない罪悪感を。実際、私はいまになってようやく理解した。日本人にはユーモアの感覚がなく、遊ぶには少なくとも二人必要だということを。位相的に考えねばならない。頂をもつ山には谷もあること。あるいは少なくとももう一人、女がいること。そして女には谷のほかに少なくとも二つの頂があること！云々かんぬん……化石と泥の沼へのこの悲劇的な墜落を乗り越えるには、それを笑い飛ばすことを学ばねばならない——*riderci*。*riderci*と書くつもりだったが、*ruderci*（それを廃墟にする）でも同じくらいうまくいくかもしれない。自分を作らねば、いや、子どもを作り、一緒に遊ばせねばならない。溶けた頂を住ませ、あれほど称賛される鈍いやつらの頭の上に小便をさせるのだ。幻滅と軽やかさとともに、子どもたちはあの場所に住むだろう。すべてが聖なる場所、そこで保存されたもっとも聖なる書物が『漏らさずに屁をこく法』と題された実用手引きであるような場所に。というわけで、あの子ども山の頂で会おう。オートバイを水平な直線に沿って押しながら、車輪を逆向きに回している、あの鈍いやつらを高雅にからかうために。遅れて残った者たちは、慣性に敗れた狂乱の進歩主義者である。ロケット弾のように、光子の速度で直線に走り、大気の重みに押しつぶされて折れ曲がる時以外は決して軌道を変えず、毎秒地球を七周半しては、そこから動くために加速したまさにその瞬間へ、いつまでも永遠に戻ってくる。そしてきっと遅かれ早かれ、鈍いやつは自問するだろう。オートバイを押すことが遅れの原因なのか、それとも自分が鈍いからオートバイを押しているのか、と。さてどうか。幸い、学ぶべきこと、手本にすべきことはいつでもある。たとえばモトレーゼの伝説的なオートバイは、よく見ればほかとは違う。六歳以上には禁じられた、超進化した未来的

バイオメカニクス技術。リリパット人の寸法に合わせた極小のカウルと、StarTAC のような原子的な小ボタン——どの番号にかけるか決めることが不可能な、あの携帯電話のような。私は、それが一部の人が「日本」と呼ぶあの場所で作られた技術だと大確信している。運命の皮肉によって、彼らはそれをいたずら電話を覚えるために使ったのだ。そしてこれも確信しているが、それは帝国主義以後の時代、乃木将軍の名高い切腹から少なくとも三十年後、フェニックスの破壊から生じた経済成長の時代にさかのぼる。要するにこの技術は、逆説的にも、たった一つのボタンを押すだけで動き出す。プッ。ザク ザク タンプ タンプ。そして発進。一発でかかると、それはロケット弾に変わり、峰のあいだを上へ突き進み、それから少し下降して、モンテチトーリオに命中する。低い山々は狂った技術の野蛮な獐猛さに生贄とされ、人間の知性をはるかに高い頂へ逃れる術を知るだろう、と語り伝えられている。もっともこのオートバイは、自発性を欠いた存在であり、ほかと変わらぬ一つの手段であって、その属性はそれをどう使うにかかっている。ともあれ、そのあいだに私は少し身を乗り出す。せめてロケット弾が働いたかどうかを見るために。働いた。モンテチトーリオはいまやパンテオンに似ている。不況は、差し伸べられた腕とチューブとレバーとブレーキとクラッチの森のあいだを進んでくる。だがバナナのおかげでも、宮殿と教会に落ちたロケット弾のおかげでもある。世界はついにフェミニズムの視座へ再び開かれた。だから私は、こう言うとき全員を代表して語っているつもりだ——私もまた少しばかりジョルジャである、と。そう、その通り！ だがなんと美しい城だろう、Marcon Diron Dirondello！ だからこそ私は頭を悩ませるのだ、と金ぴかを飾った婦人は言った。しかし原則はつねに同じだ。できないと分かっていることがあるなら、しゃべるのを控えて行動せよ。というわけで私は、フェミニズム的かつ進化論的な行動党を作りたいと確信していると確信した。その党を私たちは声をそろえて「fallo」と呼ぶだろう——やれ／男根。いつもバナナを持ち歩くのを忘れないようにしなければ。いや、後ろにではなく、クラッチバッグに入れておこう。そのほうが楽で優美だ。何しろ何が起こるか分からない。もし日本の道路海賊と間違えられたら、いつでもこの進化かあの進化かを見せてやれるし、そうすれば必ず私だと気づいてもらえるだろうから。進化と麒麟の話になると、神経が皮膚の表面まで浮き上がってくる。私はたちまちダーウィン主義者になる。いや、ダーウィン派だ。私は尻で考えるほうが好きだから。麒麟が時とともに進化したなどと考えると、私は我を失う。そもそも初めのころ、それらはケッティと陸亀とのあいだの、偶然の雑種のようなものだったらしい。細部には立ち入らないが、それらが交わって、ほとんど常に不妊であるがゆえに稀少な、首の短いソマリ麒麟という種を生んだ。ほとんど神話的な生きもの。のろまで、何の役にも立たず、出汁を取るのにさえ使えない。左へ向かう大西洋の水平横断のあと、それらに出くわした植民者たちに残酷に虐待された。そうした動物は荷役にしか使えなかったもので、植民者たちは首を引っぱり、黄金、ダイヤモンド、乳香、没薬、とうもろこし、砂糖きびの大荷を、停泊した大船の前まで曳かせた。そして疲れ果てた彼らを陸に置き去りにした。労苦に伸ばされたあの首では、船倉に収まらなかったからだ——船倉というの、確かに東洋で考案された技術である。こうして、この山の頂で小便をしながら、私は恍惚として黄昏どきの驚異を眺めている。あらゆる生きものが忙しげに見え、空気に大きな動きがあり、蚊が最

後の陽の筋のあいだを飛ぶ。その陽が退いていくにつれて薄闇が濃くなり、そこでは蝙蝠が低空を円を描いて回り、啄木鳥が最後の槌を急いで打ちつけ、太鼓の律動を速め、緑の鸚鵡たちの関の声がロケット弾のあいだで騒ぐ。そしてもう、新しい地平へふたたび渡っていく時刻なのだ。さて、もしあなたがまだ、なぜだか分からぬまま微笑んでいるのなら、それこそがこの素晴らしい読書に向かうべき正しい心持ちである。ページをめくる用意はできた。

ジオ・モンテス

（学際的アーティスト、アトリエ・モンテス芸術監督、ARTup srl 創業者兼CEO）

Luca Motolese

motolese.com — 原文はイタリア語